TS（トータル・サティスファクション）を目指して　MI6

「需要側中心の授業」の一例

校長室担当

人は基本的に人から命令されたり、コントロールされたりすることが嫌いです。「怒られること」も他人から支配されることであり、大人でも誰もが嫌うことです。本校ではなく他校で、しかもかなり前のことですが、私も生徒たちに厳しくしないといけないと考えてスパルタ式の学習を強いていた時期があります。学習においても、合格点が取れなければ追試、ペナルティ的な追課題のオンパレードで、逃げようとする生徒を追い詰めました。すると確かに成績は上がりました。模試の成績も３～５ポイントは偏差値が上昇しました。ですが、一時期で終わりました。つまり長続きしないのです。しかたなく勉強すること、つまり「やらされる」ことを覚えただけだったのです。「とりあえず、言うことを聞いていればその場をやり過ごせるという考え方は身につきました。しかし、これが社会を生き抜いていくための本当の学力なのでしょうか。

今までとは少し考え方を変え、無理を強制して教え込むのではなく、生徒の特性や意欲・関心を踏まえた学びを支えていくことが「需要側中心の授業」です。例えば、必要な「知識・技能」については、単元ごとのテストでこまめに確認し、定着を図る。これについては学習内容が得意でない生徒の心理的安全性を確保するために追試を希望制として認め、主体的に「学びに向かう力」を育てる。授業の中では教員がその専門性を活かして対話で問いかけ、生徒と教員、生徒同士でお互いの関係性を構築しながら自分なりに思考を深め、考えをまとめていく時間を設ける。評価については、「知識技能」を単元テストで、教科書持ち込み可能な定期テストというツールを用いて、「思考力・判断力」とともに「表現力」を測る。あくまでも一例で、これがベストというものではありませんが、これからの新しい社会を生き抜いていく力を必要とする生徒たちのために、「需要側中心の授業」へ勇気をもってまず一歩を踏み出していきましょう。（令和７年５月２日）